

國學院大學學術情報リポジトリ

宮古島旧平良市方言の音韻：補遺：
特集多様化する日本語研究の現在：トクシュウ
タヨウカスルニホンゴケンキュウノゲンザイ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久野, 眞, Kuno, Makoto メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000428

宮古島旧平良市方言の音韻—補遺—

久野 眞

はじめに

『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』(平山輝男編著、1984年、おうふう)
(以下、『宮古』と略す)において宮古諸島のうち、宮古島平良市(現宮古島市)、
池間島、長浜(伊良部島)、多良間島の記述を行った。

音韻についても記述したが十分に述べていない点もあり、またその後の大神島、
来間島、伊良部島の伊良部・仲地を調査し、池間島、長浜の再調査や八重山諸方
言の調査などで気づいたこともあるので本稿では平良についてあらためて音韻の
記述を行うことにする⁽¹⁾。ここでは音声実体を重視し、共通語を含む他の諸方言
との対応関係にも配慮しながら音素を考える方法をとる。

1. 音素

平良方言の音素には以下のものが認められる。

母音音素 i, ī, a, o, u

半母音音素 j, w

子音音素 ʔ, g, k, z, c, s, d, t, n, r, v, f, b, p, m

特殊音素 N, Q, R

母音音素に/e/を欠く。平良方言では連母音の融合はauだけに認められ、ai
は融合しないため、沖縄方言や波照間方言のような/e/は存在しない。故内間
直仁氏によれば宮古方言の人名に/e/があるという。ヤラビナー(童名)にメ
ガなど、名字にも前泊(マエドマリ)など人名に/e/があるが本稿では考察の
範囲に入れなかった。

2. 拍構造

上記の音素は単独または他の音素と結合して拍を作る。平良方言の拍構造には次のものがある。

C, CV, CSV, N, Q, R

(Cは子音音素, Vは母音音素, Sは半母音音素, Nは撥音音素, Qは促音音素, Rは長音音素を表す。)

3. 拍構造の特色

1) 平良方言の拍構造の特色は子音単独で拍を構成する成拍子音m, vがある。

mの例

／mR／[m:](芋) ／mRku／[mku:](膿) ／mta／[mta](土)

／'am／[am](綱、編む) ／'im／[im](海) ／nam／[nam](波)

／kam／[kam](神) ／pasam／[pa:sam](鋏)

vの例

／vcī／[vtsī](打つ) ／vdaRvda／[vda:vda](太っている)

／tivcī m／[tivtsim̄](拳) ／Nmi vcī／[mmivtsī](胸) ／kuv／[kuv](昆布)

fも成拍子音として認める可能性がある。[ŋkja] (海ぶどう) は語末で無声唇歯音が観察され、後続の母音があるような歯と唇が離れるような動きは観察されない。それは[us] (牛)、[pa:nas] (話す) のようにsの後の母音が観察されないのと同様である。共通語でも「話す」が[hana:s]と発音されることがあるが一般にはハナスのsの母音が無声化すると解釈されている。共通語では「話すよ」の場合にはハナスのsが無声化しないので音韻論的にCVの構造に変わりがないと考えて語末の母音が無声化していると解釈するのである。しかし、音声的には母音が無いことも多い⁽²⁾。

平良方言でも「牛が」は[usinu]となり母音が聞こえるので[us]を[us̄i]と解釈する。「話す」はもう一つの終止形で[pa:nasim̄]となるので[pa:nas]という音声を[pa:nas̄i]と解釈することになる。「海ぶどうが」は多くの話者で[ŋkja:funu]とfとnの間にuの母音が観察された。

平良方言では助詞が名詞に後接する場合に一定の規則が認められる。『宮古』にある記述をまとめると以下のようなになる。

名詞と「は」の融合

- ① Ciで終わる名詞に「は」が接続する場合はCjaRとなる
- ② Cuで終わる名詞に「は」が接続する場合はCoRとなる

- ③ c, z, s 以外の C i で終わる名詞に「は」が接続する場合は C i 'a となる
- ④ c, zi で終わる名詞に「は」が接続する場合は Qca となる
- ⑤ si で終わる名詞に「は」が接続する場合は Qsa となる
- ⑥ Ca で終わる名詞に「は」が接続する場合は CaR となる
- ⑦ v で終わる名詞に「は」が接続する場合は Qva となる
- ⑧ m で終わる名詞に「は」が接続する場合は Nm a となる
- ⑨ V i で終わる名詞に「は」が接続する場合は i'ja となる
- ⑩ R で終わる名詞に「は」が接続する場合は R'ja となる
- ⑪ V i で終わる名詞に「は」が接続する場合は V i' a となる
- ⑫ N で終わる名詞に「は」が接続する場合は Nna となる

名詞と「を」の融合

- ① Ci で終わる名詞に「を」が接続する場合は CjuR となる
- ② Cu で終わる名詞に「を」が接続する場合は CuR となる
- ③ c, z, s 以外の C i で終わる名詞に「を」が接続する場合は C i 'u となる
- ④ c, z, si で終わる名詞に「を」が接続する場合は Qcu となる
- ⑤ si で終わる名詞に「を」が接続する場合は Qsu となる
- ⑥ Ca で終わる名詞に「を」が接続する場合は CoR となる
- ⑦ v で終わる名詞に「を」が接続する場合は Qvu となる
- ⑧ m で終わる名詞に「を」が接続する場合は Nm u となる
- ⑨ V i で終わる名詞に「を」が接続する場合は i'ju となる
- ⑩ R で終わる名詞に「を」が接続する場合は R'ju となる
- ⑪ V i で終わる名詞に「を」が接続する場合は V i' u となる
- ⑫ N で終わる名詞に「を」が接続する場合は Nnu となる

「海ぶどうは」は話者によって[ŋkjafo:]となったり[ŋkjaffa]となったりする。「海ぶどうを」は[ŋkjaffu]である。[ŋkjafiu][ŋkjafu:]は確認できなかった。

語末の摩擦音は v だけなので[ŋkjaffa]、[ŋkjaffu]から「は」の接続と「を」の接続⑦に v に対応する無声の成拍子音を想定することができる。しかし、上述の通り、[ŋkjafunu]と母音が観察されており、f が語頭や語中でも v のように単独で拍を成す例は見られないので成拍子音とは見ない。「口」のように[ftsɪ]と聞こえる場合でもこれは共通語のクに対応する[fu]の母音が無声化したものであり、[fɪtsɪ]と見るのが順当である。

また上の規則⑤によって語末に無声化した i があると考えることも可能である。すなわち f i という拍が存在することになる。『宮古』と同様、本稿でも暫定的に f i を認めておく。[ŋkjafo:]からは語末に無声化した u があることは確認できる。また[ŋkjafunu]から[ŋkjafu]もあると認めることは問題が無い。「海ぶどう」には[ŋkjafu]と[ŋkjafɪ]の二つの語形があると考えられる。ただし、多良間方言のよ

うに[ʔi][vʔi]のようにはっきり聞こえる音声があるわけではないので、語形が二つあるのは助詞が接続した形が二つあるので単独の語形も二つあると推定するにすぎない。

- 2) CVの構造をとる時、i,a,u母音音素に対しては全ての子音音素が結合するが、iに子音音素が結合した拍には／hi／／di／／ti／／ni／／ri／／vi／を欠く。
- 3) CSVの拍に／'wa／／kwa／／gwa／の他／'wo／がある。

4. 母音音素

平良方言においては語頭の母音の前で軽い声門破裂音[ʔ]が聞かれるが音韻論的対立を示す要素ではない。本稿では[ʔ]を表記しない。母音音素は語頭で以下のような対立を示す。

／iR／[i:](柄)

／'iRku'ja／[ʔi:kuja](乞食)

／'aRsa／[a:sa](あおさ)

／'oR'oR／[o:o:](青い)

／'usi／[usi](牛)

母音は無声子音の間に立つとき、調音の位置にかかわらず無声化する。宮古島方言の特色の一つである。平良方言は有型アクセントではないと考えられるので、母音の無声化にアクセントによる影響がない。

4.1 前舌狭母音音素／i／

調音の位置は共通語と比較してやや低い。語頭では共通語のiにiが対応する例が多い。平良方言では共通語のiにはiが対応するのが原則で、iは共通語のeに対応している。iが中舌化することでiになった結果であるとされている。

語頭のイが本土方言のイに対応する例が多い理由について考える。北奥方言でも語頭ではイとエは対立せず、／e／となることが多い。母音単独では／i／は非常に少ない。『北奥方言基礎語彙の総合的研究』では母音単独の／i／を認めており、音声的には[ʔi]としている。[ʔida^kko](いたこ・下北の巫女)など所属語彙はわずかであるが、漢語や外来語を発音しようとするときには現れるとしている。語彙資料では語頭のイが／i／と認められるのは「胃」だけで、後はすべて／e／に統合している。青森、秋田では「胃」は[ʔi]のように摩擦擦音を伴うが宮古島のように大きくは響かない。また連母音の融合が盛んであり、語中にiが単独では現れない。東北方言の／e／は[e:]で、音声的には[i]に近く、若い世代では音韻論的にも／i／[i]になっている。平良方言でもこのような変化が起きた

のではないか。そうすると e>i の変化に従って i となったと考えられる⁽³⁾。

語中で平良では「灰」も「蠅」も [paʔi]、「米」も [maʔi] である。「前」は [mai] である。このことから語によって i>ī あるいは e>i>ī という変化を経たと考えられる。また語中に /i/ も /ī/ も現れるのは a i の融合がまだ起きない状態で中舌化が進んだ結果と考えられる⁽⁴⁾。

[n] の後で口蓋化はやや弱く [ni] ないし [ɲi] で表記できるが、ここでは [ni] と表記する。

語例

/iN/ [iN] (犬) /im/ [im] (海) /ica/ [itsa] (板) /kiR/ [ki:] (木)
 /saki/ [saki] (酒) /kagi/ [kagi] (影) /kazi/ [kadzi] (風) /cibita' ī
 /[teibi taʔi] (尻) /'asi/ [aci] (汗)
 /sudi/ [sudi] (袖) /tiR/ [ti:] (手) /pani/ [pani] (羽) /pari/
 [pari] (畑) /Qvi/ [vvi] (売れ) /fiRru/ [fi:ru] (呉れ) /nabi/ [nabi]
 (鍋) /piR/ [pi:] (尻) /kami/ [kami] (亀、瓶)

4.2 中舌狭母音素 /ī/

本土方言でも中舌母音は音声的に東北や山陰などに見られるが、中舌母音素となることはない。前舌狭母音素と対立するのは琉球方言の特色である。宮古諸島方言では中舌母音素は、多良間の ī で終わる名詞に「は」が後続してできる /ë/ を除けば、/ī/ だけである。波照間島方言や奄美諸方言には /ë/ があがるがそれぞれ変化過程が多良間方言とは異なる。

宮古島方言を含む先島諸方言および奄美諸方言はいわゆるズーズー弁であり一つ仮名方言である。音韻対応の上からは沖縄諸方言を含む琉球諸方言はすべて一つ仮名方言である。周知のことではあるが念のために記しておく。/ī/ は共通語のイ母音に対応するが、スズツの場合はウ母音にも対応する。

	共通語	宮古島方言
シ (肉<しし>)	/sisi/ [cici]	/siRsi/ [si:si]
ス (酢)	/su/ [su]	/siR/ [si:]
チ (道)	/mici/ [mitci]	/mci/ [mtsɨ]
ツ (月)	/cuki/ [tsɯki]	/cīki/ [tsīkʰi]
ジ (味)	/'azi/ [adzi]	/'azi/ [adzi]
ズ (数)	/kazu/ [kadzu]	/kadzi/ [kadzi]

平良方言が東北方言や雲伯方言の一つ仮名と異なるのは音韻論的に ī が /ī/ でなく /ī/ になり、/si, zi, ci/ が /su, zu, cu/ と対立することである。

/suR/ [su:] (野菜) /zu/ [dzu:] (尾) /cuRka' ī/ [tsu:kazi] (強い)

ī は p・k の後では s、母音単独あるいは g の後では z のような摩擦雑音を伴う。

bの後では多くない。mの後では摩擦噪音はないか、あってもまれである。mの後に来ることは少なく、／mi'ikaĩ／[mi'ikaʔ]（新しい）／mi'ika／[mi'ika]（三日）に見られるようにi: > iʔiに変化している例がある。

p、kの後の摩擦噪音宮古島方言に特有な現象ではない。中舌母音に伴う摩擦噪音は本土方言にもよく観察される。「秋田」が秋田市方言では[akʃita]となる。素朴に聞けば[aksta]とも聞こえる。東北地方の他の方言では[agida]となる場合もある。秋田方言だけが特別な音韻構造を持っていると見ることもないので音韻論的には／'akita／と解釈するのが一般的である⁽⁵⁾。平良方言で「人」は素朴に聞けば[psʈu]と聞こえる。「秋田」が[aksta]と聞こえるのと同様である。しかしiとĩの対応を考えれば／pĩtu／となるのが自然である。他の語との関係を見れば[pʃʈu]となっていることが分かる。例えば「息」は[iksʃ]あるいは[iksʈ]と発音される。[iksʃ]になる場合は[iks]とも聞こえる。しかし「息が」は[iksʃinu]となりはっきり母音が聞こえるので単独では母音が無声化することもあるのだと分かる。「人」は無声子音が前後にある狭母音なので母音が有声で現れることはないため、特殊な音韻のように見えるが他の語を詳細に観察すればことさら特別な現象ではないと理解できる。

「息を」「息は」は[iksʃisu][iksʃisa]のように出渡りのsが大きく響くがこれは音韻的に意味のある音ではない。「遊び」「遊びは」[asipʃi][asipʃiza]のようにzが響くこともある。話者によってsになったりzになったりする。「息」「息を」「息は」を／iki／／ikĩu／／ikĩa／、「遊び」「遊びは」を／'asipi／／'asipĩa／のように考える。

iが単独で現れる場合、例えば「米」は[maʃ]と表記する。これも[maz]のように聞こえる場合もあるが、摩擦噪音を伴わないで[mai]と発音されることもある。特に女性の方が摩擦音も気音も弱いので[mai]が現れることが多い。

ただし「米を」のように「を」が後接する場合は[maʃizu]のように出渡りの摩擦音が大きく響く。素朴に聞くと[mazzu]のように聞こえる。これも「息を」「遊びは」の場合と同じように「米」「米を」を／maĩ／／maĩu／と考える。平良方言には音素／z／があり、異音は破擦音[dz,dʒ]の2個である。一方、／i／にかかわる出渡りの[z,z]は摩擦音で決して破擦音になることはない。

「魚」は「米を」と同じで[zzu]と聞こえるが、[ʒizu]と表記し音韻的には／rũ／と考えられる。この考え方で「イオ（いを）」という本土方言との対応関係が見える。また語頭で声門破裂音[ʔ]が観察され母音であることを示している。「尾」の[dzu:]／zuR／とは音韻的に対立する。

「牛」は[usĩ]あるいは[usʃ]となる。[usʃ]は[us]とも聞こえる。[us]のsを成拍子音と見て[maz]のzと無声と有声で対になるとの見方もあるがこの見方はそもそも[usʃ]が観察されるので否定される。音韻調査において「牛が〜」[usĩnu〜]のように単語単独の形だけでなく文でも聞くということが大切であることを教え

てくれる例である。

語例

／'i'i/ [ʔiziʔi] (入れる) /fusu'i/ [fʊsuʔi] (薬) /fugi/ [fugʔi] (釘)
／daki/ [daksi] (抱く) /ziR/ [dzi:] (字) /paci/ [pʔatsi] (蜂) /siR/
[si:] (汁) /kabi/ [kabi] (紙) /pikazi/ [pʔikadzi] (日) <日数>
／miRci/ [mi: tsi] (みつつ)

4.3 中舌広母音音素 /a/

共通語のアとほぼ同じであるが、やや広く、奥よりの異音が観察される。無声子音に挟まれて無声化する点が共通語と異なる。狭母音と同様に無声子音に挟まれると無声化するのとは規則的であって、アクセントの影響により無声化しないということもない。八丈島方言も無型アクセントのため規則的に母音が無声化するが狭母音に限られる。

語例

／'akaR'aka/ [aka:aka] (赤い) /garasa/ [garasa] (烏) /kaR/ [ka:]
(皮) /Qfuzata/ [ffudzata] (黒砂糖) /'ica/ [itsa] (板) /sata/ [sʔata]
／daQkjoR/ [dakkjo:] (らっきょう) /taR/ [ta:] (田) /naR/ [na:] (名
前) /turaN/ [turan] (取らない) /Qva/ [vva] (あなた) /Qfa/ [ffa]
(子供) /bakamunu/ [bakamunu] (若者) /paR/ [pa:] (歯・葉)
／maRNtiR/ [ma:nti:] (本当)

4.4 後舌半広母音音素 /o/

共通語より調音の位置が低く [ɔ] が多く聞かれる。共通語との対応関係および池間島方言・伊良部島長浜方言との対応関係から考えて au が融合した結果生じたものであると考えられる。必ず長音を伴う。

語例

／'oRka'i/ [o:kaʔi] (青い) /goRra/ [go:ra] (苦瓜) /koRka'i/ [ko:kʔi]
(痒い) /zoRka'i/ [dzo:kaʔi] (良い) /soR/ [so:] (竿) /doRv/ [do:v]
(道具) /toRQva/ [to:vva] (台所) /noRgara/ [no:gara] (何か)
／'aroR/ [aro:] (洗う) /foR/ [fo:] (食べる) /boRcirimunu/
[bo:ʔcirimunu] (乱暴者) /poRci/ [po:ʔsi] (包丁) /moRki'i/ [mo:kiʔi]
(儲ける)

また語幹が u で終わる形容詞を二度繰り返す形で生じることがある。個人差があり u のときもある。

／'upoRpu/ [upo:pu] (大きい) /QsoRQsu/ [sso:ssu] (白い) /QfoRQfu
／[ffo:ffu] (黒い) /pisoRpī/ [pʔiso:pʔi] (広い)

上述の名詞と助詞との融合によって o が生じる。

「は」② Cuで終わる名詞に「は」が接続する場合はCoRとなる

「を」⑤ Caで終わる名詞に「を」が接続する場合はCoRとなる

「は」②語例

「魚は」 /'i'u/ + 「は」 = /'i'oR/ [ʔizo:]

「桶は」 /tagu/ + 「は」 = /tagoR/ [tago:]

「蛸は」 /taku/ + 「は」 = /takoR/ [ʔako:]

「溝は」 /mzu/ + 「は」 = /mzoR/ [mdzo:]

「道は」 /mçu/ + 「は」 = /mcoR/ [mtso:]

(/msu/ + 「は」 = /msoR/ [mso:]とも)

「塩は」 /maRsu/ + 「は」 = /maRsoR/ [ma:so:]

「暇は」 /madu/ + 「は」 = /madoR/ [mado:]

「音は」 /'utu/ + 「は」 = /'utoR/ [uto:]

「布は」 /nunu/ + 「は」 = /nunoR/ [nuno:]

「色は」 /'iru/ + 「は」 = /'iroR/ [iro:]

「穴は」 /'abu/ + 「は」 = /'aboR/ [abo:]

「肝は」 /kĩmu/ + 「は」 = /kĩmoR/ [kʰimo:]

「を」⑤語例

「心配を」 /siwa/ + 「を」 = /siwoR/ [ciwo:]

「卵を」 /tunaka/ + 「を」 = /tunakoR/ [ʔunako:]

「山羊を」 /piNza/ + 「を」 = /piNzoR/ [pindzo:]

「板を」 /'ica/ + 「を」 = /'icoR/ [itso:]

「草を」 /fusa/ + 「を」 = /fusoR/ [fʊso:]

「枝を」 /'juda/ + 「を」 = /'judoR/ [judo:]

「砂糖を」 /sata/ + 「を」 = /satoR/ [sʌto:]

「顔を」 /mipana/ + 「を」 = /mipanoR/ [mipano:]

「鎌を」 /'ĩara/ + 「を」 = /'ĩaroR/ [ʔĩzaro:]

「赤ん坊を」 /'akaQva/ + 「を」 = /'akaQvoR/ [akavvo:]

「子供を」 /Qfa/ + 「を」 = /QfoR/ [ffo:]

「唇を」 /sĩba/ + 「を」 = /sĩboR/ [sĩbo:]

「山を」 /'jama/ + 「を」 = /'jamoR/ [jamo:]

4.5 後舌狭母音素 /u/

円唇性の強い、調音の位置は低く奥よりの[u]である。本土方言のネイティブスピーカーにはオに近く聞こえる場合もあるほどである。

語例

/'usĩ/ [usĩ] (牛、白) /'utiĩ/ [utizi] (落ちる) /ma'ĩguR/ [ma'ĩgu:] (米粉)
/kuzu/ [kudzu] (去年) /cuRka'ĩ/ [tsu:ka'ĩ] (強い) /supugĩ/

[sɥpugʷi] (帯) /'jadu/[jadu] (戸) /tumi'i/[tumiʷi] (探す) /nunu/[nunu] (布) /'idiru/[idiru] (出る) /fum/[fum] (踏む) /buR/[bu:] (麻) /puR/[pu:] (帆、穂) /mumuni/[mumuni] (腿)

5. 半母音音素

5.1 /j/

共通語の/j/とほぼ同じで、3個の母音音素 a, o, u の前に立つことができる。すべての子音音素の後に続くことができる。

語例

/'jaR/[ja:] (家) /'jamka'i/[jakaʷi] (痛い) /'joRgari'i/[jo:garʷi] (痩せる) /'jumunu/[jumunu] (鼠) /ma'ju/[maju] (猫) /ŋjaRŋja/[ŋja:ŋja] (苦い) /tugjoR/[tugjo:] (とげを) /Nkja'gi'i/[kja:giʷi] (召し上がる) /pagjuR'i/[pagju:ʷi] (禿げている) /kazjaR/[kadza:] (風は) /zjoRz i/[dzo:dzi] (上手) /kazjuR/[kadzu:] (風を) /maNzjuR/[mandzu:] (パイヤ) /cjaR/[tca:] (茶) /cjoRmiN/[tco:miN] (帳面) /kacjuR/[kaʧe:] (鰹) /gusjaN/[gucan] (杖) /sjoRgaci/[co:gatsi] (正月) /sjuR/[eu:] (祖父) /'udjaR/[udja:] (腕は) /'idjoR/[idjo:] (出会う) /sudjuR/[sudju:] (袖を) /tatjaR/[taʧja:] (縦は) /'utjuR'i/[utju:ʷi] (落ちている) /njaRN/[na:n] (無い) /'unjoR/[upo:] (河豚は) /sinjuR'i/[si:ju:ʷi] (死んでいる) /Qfamurja/[ffamurja] (子守) /nagarjuR'i/[nagarju:ʷi] (流れている) /Qvjamasi'munu/[vvjamasi'munu] (羨ましい) /niQvjuR'i/[nivvju:ʷi] (寝ている) /QfjaR/[ffja:] (烏賊・蛸の墨は) /QfjuR/[ffju:] (烏賊・蛸の墨を) /nabjaR/[nabja:] (鍋は) /gabjoRmunu/[gabjo:munu] (痩せている) /bjuR'i/[bju:ʷi] (酔う) /pjaRku/[pja:ku] (百) /pjuR'i/[pju:ʷi] (日より) /mjaRku/[mja:ku] (宮古) /mjuR'i/[mju:ʷi] (姪・甥)

5.2 /w/

共通語の/w/とほぼ同じである。', g, k の後に立つ。w の後に続く母音は a, o である。

/'waR/[wa:] (豚) /siwa/[ciwa] (心配<世話に対応>) /siwoR/[ciwo:] (心配を) /pingwaN/[pingwan] (彼岸) /kwaRsi/[kwa:si] (菓子)

6. 子音音素

無声破裂音・破擦音は気音が強く、話者に語中でも気音が強く聞こえる。特に男性の方が女性より気音が強い傾向がある。

6.1 /' /

'に該当する子音的要素としては母音・半母音音素の前の「緩やかな声立て」と母音・半母音・n・v・m・Nで始まる語の語頭に声門閉鎖音[ʔ]が異音であると解釈できる。[ʔ]は個人によりはっきり響く場合もあればごく軽い場合もある。本稿では表記しない。hは音素として認めない。共通語や沖縄共通語からの借用語、外来語にhはあるが、平良方言の音韻体系には含めない。

6.2 /g /

語頭でも語中でも軟口蓋有声破裂音である。母音間で摩擦音化する傾向は観察されない。母音音素 i, ī, a, o, u の前に立つ。/gja/ /gja/ /gju/ /gwa/ がある。
/g ī/の拍は[gʔī]のように摩擦噪音と伴うことが多いが/kī/ほど大きく聞こえない。

語例

/kagi/ [kagi] (影) /'agi'ī/ [agi'ī] (上げる) /pagi/ [pag'ī] (足<脛に対応>) /kugi/ [kug'ī] (漕ぐ) /garasa/ [garasa] (烏) /kagam/ [kagam] (鏡) /Nmaga/ [mmaga] (孫) /goRra/ [go:ra] (苦瓜)
/NmagoR/ [mmago:] (孫を) /gumi/ [gumi] (ごみ) /mnagu/ [mnagu] (砂) /tugja/ [tugja] (とげ) /tugjoR/ [tugjo:] (とげを)
/kugjuR' ī/ [kugju:'ī] (漕いでいる) /gwaNsu/ [gwansu] (先祖)

6.3 /k /

語頭でも語中でも軟口蓋無声破裂音である。母音音素 i, ī, a, o, u の前に立つ。/kja/ /kjo/ /kju/ /kwa/ がある。[kʔī]から[tsī]への変化はあまり多くないが進行中のようである。伊良部島長浜方言では/kī/ > /c ī/ の変化は完了している。これには気音の強さと中舌母音に伴う摩擦噪音が関係していると考えられる。波照間島方言ではさらに/kī/ > /c ī/ > /s ī/ のような変化も見られる。

本土方言の東北方言でも/kī/ > /c ī/ の現象が見られるが、ここでも中舌母音に伴う摩擦噪音が関係していると考えられる。

語例

／kiR／[ki:](木・毛) ／saki／[saki](酒) ／kiN／[kʰin](着物<衣に対応>)
／'akina'i／[akʰina'zi](商売) ／saki／[saki] (咲く) ／kami／[kami](亀・
瓶) ／zaka／[dzaka](もぐら) ／koR／[ko:](買う) ／takoR／[tako:]
(蛸は) ／kuR／[ku:](甲羅) ／taku／[taku](蛸) ／'ikja／[ikja](烏賊)
／Nkjagi'i／[ɲkjagi'zi](召し上がる) ／kjoRda'i／[kjodai](兄弟) ／kjuR
／[kju:](今日) ／sakjuR／[saki:](酒を)

6. 4 /z/

語頭でも語中でも破擦音[dz]である。i, jの前で口蓋化して[dz]になる。母音音素 i, i, a, o, u の前に立つ。／zja／ ／zjo／ ／zju／がある。母音間で閉鎖の要素がやや弱くなることがあるが中舌母音に伴う z と紛れることはない。

例 ／'ai／[aʔi](言う) ／'a'raN／[aʔizan](言わない)
／'azi／[adzi](味) ／'aQca／[attsa](味は)

語例

／ziN／[dzin](金<銭に対応>) ／ziR／[dzi:](字・地面) ／karazi／
[karadzi](頭髮) ／zasiki／[dzasiki] (座敷) ／kaza／[kadza](におい)
／piNza／[pindza](山羊) ／piNzoR／[pindzo:](山羊を) ／tiNzoR／
[tindzo:](天井) ／zuR／[dzu:](尾) ／kazjaR／[kadza:](風は)
／zjoRtuR／[dzo:tu:](上等) ／zjuRsi／[dzu:ci](炒め飯<雑炊に対応>)

6. 5 /c/

無声破擦音[ts]である。母音音素 i, i, a, o, u の前に立つ。i, jの前で口蓋化して[tɕ]になる。／cja／ ／cjo／ ／cju／がある。

語例

／cibita'i／[tcibita'zi](尻) ／cina／[tsina](綱) ／fuci／[futsi](口)
／cisī／[tsisī](乳) ／'aca／[atsa](明日) ／ca／[tsa](終助詞<伝聞>)
／mcoR／[mtso:](味噌は) ／cuRmunu／[tsu:munu](強い) ／mcu／
[mtsu](味噌) ／cjabaN／[tcaban](茶碗) ／cjoRcjoR／[tɕo:ɕo:](蝶々)
／mucjuR'i／[mutɕu:zi](持っている)

6. 6 /s/

無声摩擦音[s]である。母音音素 i, i, a, o, u の前に立つ。i, jの前で口蓋化して[c]になる。／sja／ ／sjo／ ／sju／がある。

語例

／sina／[cina](二枚貝) ／'asi／[aci](汗) ／sisī／[sʰisī](酢、巢、煤、汁)
／sīRsi／[sʰ:si](肉) ／sa'i／[sa'zi](海老の一種) ／sata／[sata](砂糖)

／kubagasa／[kubagasa](くば笠) ／soR／[so:](竿) ／soRmiN／
[so:miN](素麺) ／QsoRQsu／[sso:ssu](白い) ／'imsja／[imca](漁師)
／sjoRgaci／[co:gatsi](正月) ／kurasjuR'i／[kuraçu:ʔi](暮らしている)

6.7 /d/

有声破裂音[d]である。母音音素 i, a, o, u の前に立つ。／di／はない。i, j の前でやや口蓋化するが[dz]になることはない。／dja／ ／djo／ ／dju／がある。

語例

／'udi／[udi](腕) ／daraka／[daraka](嘘) ／'juda／[jud](枝)
／'juda'i／[judaʔi](涎) ／duR／[du:](体) ／dusi／[dusi](友達)
／madu／[madu](暇) ／madoR／[mado:](暇は) ／kakadjaRN／
[kəkadja:n](書かない<意志の否定>) ／'udjaR／[udja:](腕は) ／'idjoR／
[idjo:](出会う) ／'udjuR／[udju:](腕を) ／'idjuR'i／[idju:ʔi](出ている)

6.8 /t/

有声破裂音[t]である。母音音素 i, a, o, u の前に立つ。／ti／はない。i, j の前でやや口蓋化するが[te]になることはない。／tja／ ／tju／がある。

語例

／tiR／[ti:](手) ／tida／[tida](太陽) ／ta'ja／[taja](力) ／kata／
[kəta]ばった) ／toR／[to:](誰、唐) ／tuR／[tu:](十) ／tubi／[tubʔi]
(飛ぶ) ／tu' i／[tuʔi](鳥) ／'utjaR'i／[utja:ʔi](落ちている) ／'utjuR'i／
[utju:ʔi](落ちている)

6.9 /n/

鼻音[n]である。母音音素 i, a, o, u の前に立つ。／ni／はない。i, j の前でやや口蓋化するが／ni／は[ni][ni]の両方が現れる。本稿では[ni]と表記する。共通語と比べて口蓋化が弱いのはiの調音位置がやや低いことと関係があると考えられる。jの前では口蓋化がiの前より強く、[ɲ]と表記する。／nja／ ／njo／ ／nju／がある。

語例

／niR／[ni:](根) ／niR'i／[ni:ʔi](煮る) ／tani／[tani](種) ／naba／
[naba](垢) ／Nnama／[nnama](今) ／gaRna／[ga:na](あひる)
／noR／[no:](何) ／noRsi／[no:si](直す) ／cikanoR／[tʃikano:](飼う)
／num／[num](蚕) ／nuRma／[nu:ma](馬) ／Nnuci／[nnutsi](命)
／munu／[munu](物) ／'unja／[uɲa](河豚) ／tanjaR／[taɲa:](種は)
／'unjoR／[uɲo:](河豚を) ／tanjuR／[taɲu:](種を) ／sɲjuR'i／
[sɲju:ʔi](死につつある)

6.10 /r/

共通語とほぼ同じ弾き音である。ここでは[r]を用いる。波照間島や新城島ではふるえ音が観察されたり、伊良部島や多良間島にそり舌音があったりして /r/ の変種が多いことは先島諸方言の特色と言えよう。

母音音素 i, a, o, u の前に立つ。/rĩ/はない⁽⁶⁾。/rja/ /rjo/ /rju/がある。

語例

/riNci/ [rintsi] (やきもち<恠気に対応>) /turi/ [turi] (凧、取れ)
 /raku/ [raku] (楽) /tara' i/ [tara'ɪ] (盥) /ra'iN/ [rain] (条件可能の打ち消し<られぬに対応>) /tura/ [tura] (寅<干支、方角>) /baroR/ [baro:] (笑う) /'iroR/ [iro:] (色は) /'iru/ [iru] (色) /saRru/ [sa:ru] (かまきり) /Qfamurja/ [ffamurja] (子守) /QfamurjoR/ [ffamuro:] (子守を) /furjuRĩ/ [furju:ɪ] (降っている)

6.11 /v/

共通語にはない音素で、宮古諸島方言の特色の一つである。有声唇歯音[v]であるが、唇歯接近音[v̥]になることもある。摩擦音の弱化の結果として母音に変化したと考えられる例がある。「虹」は /tiNba'u/ [timbau] であるが、伊良部島長浜方言の [timpav] が平良においても古い形であって、摩擦音が接近音を経て母音になったものであろう⁽⁷⁾。

語頭、語中、語末で単独で拍を作ることができる。母音音素 i, a, o, u の前に立つ。/vĩ/はない。/vja/ /vju/がある。

語例

/vra/ [vra] (裏) /vdaRvda/ [vda:vda] (太っている) /tivcim/ [tivtsim] (握り拳) /Qvi/ [vvi] (売れ) /Qva/ [vva] (あなた) /'juQva/ [juvva] (粥は) /QvoR/ [vvo:] (あなたを) /'juQvu/ [juvvu] (粥を) /Qvjamasimunu/ [vvjamasimunu] (羨ましい) /niQvjuRĩ/ [nivju:ɪ] (眠っている)

『宮古』に v と共通語との対応関係がまとめてあるので以下に示す。

- ① 共通語の bur に対応する。

/'aQva/ [avva] (油) /kav/ [kav] (被る) /niv/ [niv] (眠る) /'av/ [av] (炙る)

- ② 共通語の 'ur に対応する。

/vra/ [vra] (裏) /vR/ [v:] (売る) /Qvjamasika' i/ [vvjamasika'ɪ] (羨ましい)

- ③ 共通語の gur に対応する。

／tav／[tav] (たぐる)

- ④ 共通語の bu に対応する。

／sivR̥siv／[siv̥:siv̥] (酸っぱいく渋いに対応) ／kiv̥siv̥／[kiv̥siv̥] (煙)

／nivR̥niv／[niv̥:niv̥] (鈍い) ／pav／[pav] (蛇くはぶに対応) ／kuv／
[kuv] (昆布)

6.12 /f/

共通語にはない音素で、宮古諸島方言の特色の一つである。無声唇歯音 [f] である。母音音素 i, a, o, u の前に立つ。先述の通り /fi/ は一応想定しておく。

／fja／ ／fjo／ ／fju／がある。／fu／は共通語の／ku／と／hu／に対応する。

語例

／fiR̥i／[fi̥:ʔ] (呉れる) ／Qff／[ff] (烏賊・蛸の墨) ／faRN／[fa:n] (食わない) ／Qfa／[ffa] (子供) ／Qfakḁi／[ffakḁʔi] (暗い) ／maQfa／
[maffa] (枕、真っ暗) ／NkjaQfa／[ŋkjaffa] (海ぶどうは) ／fusu̥i／
[fusu̥ʔi] (薬) ／fusi／[fuci] (癖) ／fum／[fum] (汲む、踏む) ／foR／
[fo:] (食う) ／NkjafoR／[ŋkjafo:] (海ぶどうは) ／QfoR／[ffo:] (子供を)
／fusa／[fusa] (草) ／fusari̥i／[fʊsari̥ʔi] (腐る) ／fuQza／[fuddza] (鯨)
／'ifuci／[ifʊtsi] (いくつ) ／fukuru／[fʊkuru] (袋) ／futa／[fʊta] (蓋)
／fuki／[fʊks̥i] (吹く) ／fukakḁi／[fʊkakḁʔi] (深い) ／QfjaR／[ffja:] (烏賊・
蛸の墨は) ／'jaduQfja／[jaduffja] (引きこもりがちな人) ／'jaduQfjoR／
[jaduffjo:] (引きこもりがちな人を) ／QfjuR／[ffju:] (烏賊・蛸の墨を)

6.13 /b/

有声両唇破裂音で共通語の /b/ とほぼ同じである。母音音素 i, i, a, o, u の前に立つ。／b i/ の拍では [bʔi] のように摩擦雑音を伴うことが多いが p i や k i

のような無声破裂音より摩擦雑音が少なく m i よりは多い。／bja／ ／bjo／
／bju／がある。

語例

／bikidum／[bikidum] (男) ／'ibi̥i／[ibi̥ʔi] (植える) ／'u'ibi／[uibi] (指)
／nabi／[nabi] (鍋) ／biR̥／[bʔi:] (座る) ／kabi／[kabʔi] (紙) ／bata／
[bata] (腹) ／bḁi／[bḁʔi] (割る) ／gabashjuR／[gabacu:] (曾祖父)
／saba／[saba] (草履) ／boR／[bo:] (棒) ／boR̥cirimunu／
[bo:ʔcirimunu] (乱暴者) ／buR／[bu:] (麻、緒) ／butu／[butu] (夫)
／bu̥i／[bu̥ʔi] (折る<「織る」は[uʔi]>) ／buba／[buba] (伯母) ／'abu／
[abu] (穴) ／nabjaR／[nabja:] (鍋は) ／gabjoRmunu／[gabjo:munu]
(瘦せている) ／bjuR̥ i／[bju:ʔi] (酔っている) ／'ibjuR̥i／[ibju:ʔi] (植え

ている)

6.14 /p/

母音音素 i, i, a, o, u の前に立つ。/p i/ の拍では [pʰi] のように摩擦雑音を伴うことが多い。/pja/ /pjo/ /pju/ がある。

p が語頭に現れることが多いのは、語中ではハ行転呼が起きているからである。本土方言では歴史的に母音間で [ɸ] > [w] という変化が起き、語頭では [ɸ] > [h] になったとされている。母音間の [w] は w a 以外はその後母音に変化した。本土方言でも沖縄方言でも [ɸ] が残っているのは語頭に限られるようである。そこで先島に見られる p は新しいのか古いのか議論があるが未だ決着を見ない。気音の強さも変化の契機となる。p, k の気音の強さは中舌母音の摩擦雑音の長さ、c の摩擦の持続時間が長くなる傾向をもたらし、波照間島のように破擦音が摩擦音に、摩擦音が破擦音になるような変化の原因になる。大神島や与那国島では破擦音が破裂音になる変化も起きている。

竹富島には ff から p² に変化した例⁽⁸⁾ がいくつかあるが、枕崎方言の kw が p に変化する現象や青森方言の ku > ɸu の例など「唇音化」の問題全体を見渡して検討する必要があると考える。

語例

/pizi/ [pidzi] (肘) /piR/ [pi:] (尻) /pira/ [pira] (へら<草取りなどの作業用>) /piĩ/ [piĩ] (にんにく、行く、針・鋸) /'asi̯pi/ [asĩpi] (遊べ) /pidaĩ/ [pʰidaĩ] (左) /pikaĩ/ [pʰikaĩ] (光る) /pigi/ [pʰigi] (髭) /pitu/ [pʰitu] (人) /paR/ [pa:] (歯、葉) /pagi/ [pagʰi] (足) /paku/ [pʰaku] (箱) /pana/ [pana] (花、鼻) /poRki/ [po:kʰi] (箒、掃く) /'upoRpu/ [upo:pu] (大きい) /puR/ [pu:] (帆、穂) /puni/ [puni] (骨) /puĩ/ [puʰi] (掘る) /pjaRpjaR/ [pja:pja:] (早く) /pjoRsi/ [pjo:si] (時たま) /'asi̯pjuRĩ/ [asĩpju:ĩ] (遊んでいる)

6.15 /m/

共通語とほぼ同じ両唇鼻音 [m] である。母音音素 i, a, o, u の前に立つ。/mi/ はまれである。/mja/ /mjo/ /mju/ がある。語頭、語中、語末で単独で拍を作ることができる。

語例

/mR/ [m:] (芋) /mRku/ [m:ku] (膿) /mta/ [mta] (土) /mzu/ [mdzu] (溝) /'am/ [am] (編む) /'im/ [im] (海) /nam/ [nam] (波) /kagam/ [kagam] (鏡) /midum/ [midum] (女) /'amam/ [amam] (やどかり) /kamkakarja/ [kamkʰakarja] (巫女<神かかり + 「あ」に對

応>) /miR/[mi:](目) /mi'ika/[mi'ika](三日) /miRci/[mi:tsi]
 (三つ<話者によって[mi:tsi]>) /tumiR/[tumi:](探して) /ma'i/
 [mai](前) /mami/[mami](豆) /'uma/[uma](そこ) /'umaci/
 [umatsi](火) /Nma/[mma](祖母) /NmoR/[mmo:](祖母を)
 /moRki'i/[mo:ki'i](儲ける) /muku/[muku](婿) /fumu/[fumu]
 (雲) /NmjaRi/[mmja:ɥi](いらっしゃる) /mjaRrabi/[mjarabi](娼
 婦) /mamjaR/(豆は) /'jaRzimja/[ja:dzimja](守宮) /'jaRzimjoR
 /[ja:dzimjo:](守宮を) /mjuRtura/[mju:tura](夫婦) /mamjuR/
 [mamju:](豆を) /numjuR'i/[numju:ɥi](飲んでる)

7. 特殊音素

7.1 /N/

音環境により異音が生じる。音変化により語頭、語末に立つ例が多い。語末で n が共通語の /ni/、/nu/ に対応して m と対立するように見えることがある。「銭」「犬」が語末で [n] と発音されることが多いからである。しかし、「鋏」[paʃam] が「鋏から」の場合も [paʃamkara] となっており、m が変わらないのに対し、「銭から」「犬から」は [dʒiŋkara] [iŋkara] となり音環境に影響される。語末の n は /N/ の異音の free variation である。与那国島方言では /N/ が語末でも母音間でも [ŋ] になるが、宮古地域でもある程度はその傾向が見られる。

東京方言は語頭で umV が mmV となる傾向があるが宮古島ではもっと規則的に mmV になる。

語例

語末で [N] である。

/kaN/[kaN](蟹) /'uN/[uN](鬼) /'akoRN/[ako:N](うに)
 /ga'iciN/[gaitciN](雲雀) /saNsiN/[saŋciN](三味線)

m、p、b の前で [m] である。

/Nmaga/[mmaga](孫) /mari'i/[mmari'i](生まれる) /tiNpura/
 [timpura](てんぷら) /paNbiN/[pambin](揚げ物) /Nbusi/[mbusi]
 (蒸す)

z、c、d、t、r、n の前で [n] である。

/Nzi/[ndzi](どれ) /piNza/[pindza](山羊) /baNta/[banta](私
 たち) /kaNru/[kanru](寒露) /Nnama/[nnama](今)

g、k の前で [ŋ] である。

/Ngī/[ŋg'i](右) /'aNga/[aŋga](姉) /Nkazi/[ŋkadzi](百足)
 /NkjaRN/[ŋkja:N](昔) /Nkī/[ŋk'i](神酒)

7.2 /Q/

z, c, s, t, v, f の前に立つことができる。

語例

/fuQza/[fuddza] (鯨) /kakaQzaN/[kəkaddzan] (囁らない) /'aQca/[attsɑ] (足駄) /QsaN/[ssɑn] (知らない) /kuRQtoR/[ku:ttɔ:] (来るよ) /Qva/[vva] (あなた) /Qfa/[ffa] (子供)

共通語と異なり動詞の促音便はない。上述の名詞と助詞との融合により

「は」 c, z, s i で終わる名詞に「は」が接続する場合は Qca となる

「を」 c, z, s i で終わる名詞に「を」が接続する場合は Qcu となる

また、Cir、Cur の環境にある s、f、v に r が同化して ss, ff, vv の促音を構成する。

加治工 (1977) では以下のように記述している。

$C_1V_1-r-V_1 > C_2C_2V_2$ において

$C_1 =$ 無声子音ならば $C_2 =$ 無声子音 … ①

$C_1 =$ 有声子音ならば $C_2 =$ 有声子音 … ②

ただし、①②の V = 狭母音

例①

maffa (枕) makura > maffa

ffakam (暗い) kura > ffa~

ffu (黒) kuro > ffu

ffu (降る) furu > ffu

fi:m (くれる) kure > ffi > fi:

mussU (筵) musiro > mussU

ssam (虱) sirami > ssam

sslkam (白い) siro > ssu~ > ssI~ (平良では ssu~)

passa (柱) pasira > passa (平良では [pa:sira])

passim (忘れる) wasure~ > ḥasure~ passim

例②

avva (油) abura > avva

avvi (炙れ) aburi > avvi

kavvi (被れ) kaburi > kavvi

vva (君) ura > vva

vvi (売る) uri > vvi

tavvi (たぐる) taguri > tavvi

さらに k が f に変化したためには並行的に g が v に変化したとも指摘している。

管見に入るかぎり、この法則を最初に指摘したのは加治工真一 (1977) であり、

これを加治工の法則と呼ぶことにする⁽⁹⁾。

平良方言で「平良」[p̄sara]、「手の平」[tibidza]なるのは中舌母音に伴う摩擦騒音に r が同化して音素として成立した結果と考えられる。同様に「切る」が [k̄s̄si]、[k̄s̄san] (切らない)、[k̄s̄s̄itazi] (切った)、[k̄s̄ci] (切って) のように活用するのも摩擦騒音 s に r が同化して子音の交替が起きたものである。

7.3 /R/

共通語と同様に先行する母音を1拍分伸ばす。その他に m、v を1拍分伸ばすことができる。宮古方言の大きな特色の一つである。共通語の1拍名詞は京都方言や琉球諸方言で長音を伴って2拍になっている。

語例

／iR／[i:] (柄) ／miR／[mi:] (目) ／iR／[ʔi:] (飯) ／ziR／[dzi:] (字、地面)
 ／aR／[a:] (泡) ／taR／[ta:] (田) ／oR'oR／[o:o:] (青い)
 ／tuR／[tu:] (十) ／mR／[m:] (芋) ／vR／[v:] (売る)

注

- (1) 調査は1981, 2年に行われたものにもとづくため、すでに当時の話者に会って確認することが困難な状態であることをこわしておく。
- (2) 川上素 (1977) では「かすか」[kaska] 「捨てる」[steru] のように s が1拍分持続して「す」に該当することがあると述べている。音韻論的には /su/ であって s を成拍子音と考えているわけではない。
- (3) 川本栄一郎 (1965) では語頭で老年層の i が若年層では e に変化している状態を詳細に記述している。音声記号にも摩擦騒音は表記してなくて、無意識だったと思われる。ネイティブスピーカーである川本氏本人に実際に発音してもらったところ、[zi] のように摩擦騒音が聞かれたが本人は気づかないということだった。
- (4) 平山輝男編著 (1988) によると石垣市では「灰」「虻」ともに [pai] あるいは [hai] となっている。久野真 (2002) には波照間島方言では「灰」「南」は [pɛ:] ([paɛ] の連母音が融合した結果と思われる)、「虻」は [pe:] ([pai] の連母音が融合した結果と思われる) と記述されており、イ母音が中舌化するのが連母音の融合より早かったために、融合しても中舌的要素が保存されたものと考えられる。東北方言をはじめ、本土方言では中舌的要素を保持した連母音の融合についてはほとんど報告がない。奥出雲方言に「汁」が [sə:], 「鶴」が [tsə:] と発音される例がある。
- (5) 方言によっては [agida] ともなる。有声化と鼻音化を無声子音音素と別の音韻と解釈して、/agida/ とする立場もあるがここでは論じない。
- (6) 石垣島、波照間島、新城島には [ri] がある。
- (7) 有声摩擦音は次第に弱体化しつつある。女性は声も小さく、摩擦音から接近音になる傾向がある。例えば「虻」が [pav]、「米」が [mai] と発音されて摩擦が聞こえない。どちらもともすれば [u] のように聞こえることがある。しかしウが2種類あるわけにはいかないので、変化の結果は [u] になる。だが、促音や助詞との融合の環境では摩擦音が大きいままである。例えば「油」[avva] 「虻」[pavva] 「米」[maʔiza] である。池間島方言では単独の v が u に、中舌母音が前舌母音に変化する過程にある。「虻」は [hau] に、「米」は [mai] 変化して

いるが「油」は[avva]として残っている。

- (8) 久野眞 (1992) には「烏賊の墨・降って」[pʔ] (宮古のような丘から変化したものである)、「鞍」[pʔa] (ffa から変化)、「陰毛<黒毛に対応>」[pʔui] (ffuki から変化) などの例がある。
- (9) r が s に同化する現象は、例えば仙台で「面白い」を[omocce]、名古屋で「そうかしらん」を[ho:kacan]、相生で「言ってやろうかしらん」を[ju:tarokassan]と行うように日本各地で見られるある意味で普遍的な現象である。平良では「草」は[ɸysa]であり大神のように[ssa]にはならないが、『現代日本語方言大辞典』の「草」の項目に富山市の古い言い方ではッサ[ssa]という記述が見える。

参考文献

- 久野眞「波照間方言の音韻」(2002年、『日本語論究1』和泉書院)
- 久野眞「竹富島方言の音韻」(1992年、『琉球竹富島の方言 黒潮文化圏の言語研究』國學院大學)
- 久野眞「新城島方言の音韻」(1992年、『南琉球新城島の方言』國學院大學日本文化研究所編)
- 平山輝男他編『現代日本語方言大辞典』(1992年、明治書院)
- 平山輝男編著『南琉球の方言基礎語彙』(1988年、おうふう)
- 平山輝男編著『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』(1984年、おうふう)
- 平山輝男編著『北奥方言基礎語彙の総合的研究』(1982年、おうふう)
- 加治工真一「音韻」『琉球の方言 宮古大神島』(1977年、法政大学)
- 川上泰『日本語音声概説』(1977年、おうふう)
- 川本栄一郎「青森県下北方言の「イ」と「ウ」」(1965年、『国語学』61集)